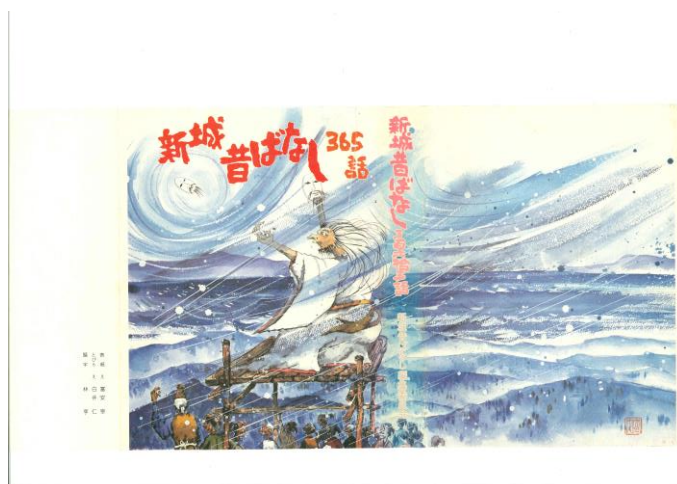


しんしろまちなかの昔ばなし

しんしろまちなか散策を考える会

新城地域自治区（新城小学校区）の昔ばなし22話を集めました。



出典 新城市教育委員会
新城昔ばなし 365 話

で囲われた記事は新城昔ばなし365話を掲載しています。

「(撮影 しんしろまちなか散策を考える会)」の表示がある写真は、しんしろまちなか散策を考える会が現地を訪ねて撮影したものです。

① お殿様が建てた^{こうしんどう}庚申堂

これからきびしい冬のくるといふ11月のころでした。

新城のお殿様の菅沼定実^{さだざね}という人が、馬に乗って領内の様子を見てまわっていたときのことです。間之町^{あいのまち}の四ツ谷というところまできますと、どうしたことか、馬がつつんと鼻をならして止まってしまい、どうしても動こうとしません。道ばたの松の木が枝ぶりのよい姿をみせて、道の上にかぶさるように立っています。お殿様は、なぜ馬が進まないのか不審に思われて、ふと頭を上げてごらんになりますと、松の木の上に大きな蛇がとぐろを巻いておりました。

「これはおかしいぞ。蛇は寒くなると土の中に入って冬ごもりをするはずなのに、松の木にとぐろをまいているのはどうしたわけだろう」と言ってお供^{とも}の者に知らせようとした。家老の今泉三郎右衛門だけにはすぐに、その蛇がわかりましたが、他の家来衆にはどうしても見えません。ただぼかんとしているばかりです。

「これは不思議なこともあるものだ。今日は^{こうしん}庚申の日だが、何かめでたい事のあるしるしかも知れない。」とおっしゃって、お城にお帰りになりました。

その後、お殿様は信心を新たにし、松の木の下にお堂をたて、^{*}庚申の石像を納めて秘仏にしたということです。これからここを間之町の庚申様といつて、代々のお殿様や、家来、村人をはじめ、遠くの人々の信仰をあつめ、また、かずかずの寄進がありました。それから50年ほどたって、定易^{さだやす}というお殿様が、お堂を再建して、庚申寺というようになりました。

今のお堂は、昭和52年の5月に新しく建てなおしたものです。

※石像は板碑で、上に胎藏会大日如来の種子^{しゆじ}をしるし、次に立塔の趣旨、下に三猿の像が刻んである。



(撮影 しんしろまちなか散策を考える会)

② 幽玄橋のいわれ

今から約430年前、1592年～1595年（文禄年間）^{ぶんろく}のころのことです。宇利に
榊原幽玄^{さかきばらゆうげん}というお医者様がありまして、新城へ来ておりました。新城といっても、橋向付
近にみえたのではないかと思います。

昔は、川には橋もなく、道を歩いてきて、川のところにくると、ジャブジャブとわらじ
のまま入って向こうへ出るという、まことに不便なことでありました。このころから交通
の量もだんだんふえてきましたので、いちいち川へ下りていくのは大変だということで、榊
原幽玄さんが橋をかけました。それは、ただ丸太を渡した程度の橋だといいますが、それ
でも往来の人々のためには大変便利であったと思います。

その後、1606年（慶長11年）^{けいちょう}水野分長^{みずのわけなが}というお殿様が、知多の緒川^{おがわ}から、1万3
千石で新城へ入ってきました。この頃から、住民や人家がだんだんとふえ、やや城下町ら
しくなってきたと思われます。

この水野という殿様の家来に竹内弥五左衛門^{やござえもん}、竹内七郎右衛門^{しちろうえもん}という2人の家老がいま
した。

ある日、この2人が馬に乗って幽玄橋へさしかかった時のことです。竹内七郎右衛門の
馬がパツとはねたもんですから、弥五左衛門の馬がびっくりして、またこれがはね上がり
ました。弥五左衛門は、幽玄橋から川へ落ちてしまいました。

それを見ていた七郎右衛門は、「どうか橋向の八幡様。この土橋を落馬しないように、向
こうへ渡れますように、お守りください。もし、無事に渡れましたら、お社^{やしろ}を建てて差し
上げましょう。」と、目を閉じて、一心におがみましました。そして土橋を安々と渡ったという
ことだそうです。どうも、幽玄橋の土橋と、そのころの記録にありますので、さきに榊原
幽玄がかけた丸太の橋が、この時には土橋になっていたようです。武芸達者な上級の武士
が落馬するというぐあいですから、土橋のかかっていた川までよほど坂になっていて、道
も悪く、橋も上等なものではなかったということが想像されます。いずれにしても、この
川を榊原幽玄にちなんで、幽玄川とし、橋は幽玄橋としたことだろうと思います。



(撮影 しんしろまちなか散策を考える会)

③大善寺の「六人仏」

大善寺の墓地には、江戸時代のはじめから、今日までの長い間のお墓が、無縁仏までふくめて千数百基もたっています。その中で、「六人仏」とよばれているお墓が、6つならんでいるのが目をひきます。

高さ40センチほどの台石の上に、笠のついたお墓が二つ、笠のつかないのが4つ、苔がついて相当古いもののようです。

正面にそれぞれ

剣即欣応居士

剣至理白大姉

剣夢幻心信女

剣功緑霜信士

剣宥香夢童子

剣接了風童子

と、法名が刻まれています。どれにも「剣」の字が上についているのが奇異に感じますが、これは、みんな自らの命を断つた人たちのものに違いありません。

お寺の過去帳によりますと、6人は、新城藩の家臣で、牧野彦太夫と、その妻、そしてその子どもの4人です。享保10年（1725）2月25日、同じ日に亡くなっています。彦大夫56歳、妻45歳、長女21歳、長男16歳、二男13歳、三男9歳でした。長女21歳といえは今では娘ざかり、短い花の命でありました。

どうして一家6人が自らの命を断つことになったのでしょうか。お寺のいい伝えによると、こういうお話がありました。

牧野彦太夫は、新城藩の家臣で、相当上級の地位にあった人です。享保といえは、江戸時代の中ごろ、戦もなく、世の中はたいへん平和で、人々は豊かなくらしをしていました。武士たちの間には、武士としての修練をおこたったり、ぜいたくをするものもあらわれて、全体の士気があがらず、質実剛健という武士の気風がくずれていました。

そのことに我慢がまんができなくなった彦太夫は、「意見書」を書き、それを殿様に直接差し出して、藩士たちに対し、きびしい儉約令けんやくれいを出すように……と、具体的な内容をそえてお願いしました。どんなことにしても、殿様に直訴じきそすることはいけないとされていた時代のことです。城からもどった彦太夫は、家臣かんげんでありながら主君に諫言かんげんを申し上げたことは大変無礼なことであったと、深く反省し、妻と4人の子どもとともに、自刃じじんしてしまいました。

それにしても、罪科つみとがのない幼い子どもたちまで、死出のともにするとは、なんとも痛ましい事件でありました。



(撮影 しんしろまちなか散策を考える会)

④^{なた や} 鉤屋へ入った^{どろぼう} 泥棒の話

それは江戸時代も終わりに近い嘉永五年（1852）7月5日のことです。鉤屋へ泥棒がはいり小判838両という大金を盗んで逃げましたが、あまりの大金でさぞ重かったので、包紙が破れて途中でお金をこぼしていきました。

この金^{かね}の額^{がく}については、いい伝えでは100両ということでしたが、町回り役人の記録^{まちなわ}が見つかって、はじめてそんな大金であることがわかりました。お金を落としていったことから足がついたので、橋向で番人の^{こへい}小平につかまってしまうました。なんでも遠州^{えんしゅう}の無宿者^{むしゆくもの}（戸籍^{こせき}のない者）の峰蔵^{みねぞう}というのだそうです。鉤屋では泥棒もつかまり、お金もどったことだから、命は助けてやってほしいと助命を願い出ましたので「10両で打ち首^{くび}」という時代でしたが、峰蔵は結局、永牢^{えいろう}ということになりました。

ところが翌年正月2日の夜、一大事件がおこりました。峰蔵が牢^{こうし}の格子を焼きぬいて逃げてしまったのです。新城近在を大勢でさがすとともに、役人3人に小平がついて遠州までさがしに出かけました。けれども行方^{ゆくえ}はわかりませんでした。

しばらくして、遠州の役人の方から召し捕^{めと}ったというしらせがありました。今度は7人して受け取りに出かけ、峰蔵を連れ帰りました。評定のすえ、打ち首ということになりました。打ち首は2月22日、片山で、大勢の人が見守る中で行われました。

番人の小平は、泥棒を逃げたということはおとがめなしということで、刀をさすことを許され、ほうびのお金ももらいました。小平は大変よろこんで、大善寺に大きな手水鉢^{ちょうずばち}を寄進しました。これには、青山小平と名^{きざ}が刻まれています。



(撮影 しんしろまちなか散策を考える会)

⑤白へび様

昔、富永神社は広い森におおわれ、大きな木が生い茂っていて、
昼間でも薄暗い不気味なところでした。この森の中でも一段と太く、
何百年も経った巨木が^{こまいぬ}狛犬さんの東側に立っていました。



ある年の夏のことでした。突然空がかき曇り、激しい雷が鳴り出し、
^{いなすま}稲妻が町々の屋根を襲ってきました。しばらくすると、富永神社の森に、大地が割れると思われるほどの音とともに、大きな雷が落ち、その巨木は何百年もの思いを抱いたまま、すさまじい勢いで倒れてしまいました。

それから何日かたったある日のことです。どこからともなく白い色をした蛇が姿を現わし、倒れた巨木の中へ入っていきました。そして、その白蛇はその後一度も外に姿を現わしたことはありませんでした。

町の人たちのいい伝えでは、白蛇は神様になってしまったということです。



(撮影 しんしろまちなか散策を考える会)

こんたい

⑥金胎寺の和尚さま

新城駅から200メートルくらい東へ行ったところに、金胎寺というお寺があります。このお寺の6代目の和尚さまは、新城城の殿様にたいそう信用されていました。そこで、殿様は、金胎寺へ「かめ こうやま亀の甲山」という山をあげることにしました。この和尚さまは、それを大そう喜んで、「わしが死んだら、この山にほうむ葬ってくれ」と遺言をして亡くなりました。

この和尚さまは、せんき疝気という病気を持っておりました。和尚さまは、この病気にとっても苦しんでいたものですから、死ぬまぎわに次のようなことを約束していきました。

「わしのお墓におまいりをしてくれたら、疝気をなおしてあげよう。疝気でなくても病気をなおしてほしければ、お酒とにぼしをおそなえとして出してほしい。そうすれば、必ずなおしてあげよう。」

和尚さんが亡くなってから、病気をなおしてもらいたい人が大ぜいありました。この人たちがお墓におそなえしてお願いしますと、必ず病気がなおったということです。

その後、大正三年に「亀の甲山」からお墓を今の金胎寺に移して、ほこらを建てました。そこに像をまつり、「しらひげだいごんげん白髭大権現」というようになりました。



(撮影 しんしろまちなか散策を考える会)

⑦咳の神様

宗堅寺の墓地の奥に、咳の神様がおまつりしてあります。2つの祠がならんでいますが、瓦の屋根がこわれて、木の箱のような屋形に入っています。

昔、どこの人かわかりませんが、お寺の前まできて倒れてしまいました。そして、わしをまつってくれたら、のどの病気はなおしてあげるといい残して死にました。

みんなで葬りましたが、誰いうとなく、風邪の神様で、咳が出て困るときは、とてもご利益があるという話です。願をかけるときには、なおったら豆をあげますから、とおまいりすると、よくなおるということです。

豆はマメ（健康）になるということなのでしょう。今はおまいりする人も少なくなって、咳の神様を知らない人が多くなりました。



(撮影 しんしろまちなか散策を考える会)

とうぎゅうじ
⑧桃牛寺の門

的場の桃牛寺にある門は、長篠城にあった門（弾正門^{だんじょうもん}）を持ってきたものだと言われています。

門の左側のとびらには、鉄ぼうのたまの跡^{あと}が残っています。この鉄ぼうの跡は、長篠の戦いの時、武田軍がうったたまの跡だそうです。

とびらには、何本もの鉄がはめてあり、敵が押し寄せてきても、簡単には開けないようにできています。

長篠の戦いがすむと、長篠城は廃城になり、新城に新しい城ができました。

それから400余年がたっていますが、お城の建物のうちに残っているのは、この桃牛寺の門だけです。どうしてこの門だけが残されたのでしょうか。



(撮影 しんしろまちなか散策を考える会)

⑨ 亀と妙見様 みょうけん

永住寺の山門をはいると、すぐ左手に亀にのった石碑が目にとまる。

これはさくら淵の上にある妙見堂の境内から移したものである。

妙見様の下は、新河岸しんがしと呼んでいるが、以前の河岸は山本ボート付近にあったが川底がかわったのでここに移された。明治5年には、この新河岸に新城物産（後に8年余県会議員を勤めた城所一郎氏が中心になってつくった荷物取次ぎの会社）ができ、たくさんの川船と荷物を運ぶ馬でにぎわい、船頭の宿所や倉庫などが並んでいた。

北辰（北斗七星）を妙見菩薩ほさつとして信仰する妙見様は、船頭たちによってまつられ、後には一般の信者も多かった。妙見様の信者はとくに、亀をいじめることを忌みきらった。

ある時、本町の間屋の赤谷勘十郎の船頭のひとりが、川から出てきた亀さおを竿でつついていじめた。すると、その船頭は気が狂って、船からはい出して川にはいろうとするようになった。驚いた勘十郎が妙見様のお堂の後ろの大松の下に亀の石碑を建てて供養したら、船頭の気狂いがなおったという。

昭和5年に、妙見様のお堂が火事で焼けた時、永住寺に移された。今のお堂はその後に再建されたものである。



(撮影 しんしろまちなか散策を考える会)

⑩町並を通っていた水路

新城の町並の通りには、真ん中に1本の用水路が通って
いました。最初は新城城のお濠ほりに水を引くために作られた
ものだといいます。永住寺えいじゅうじの前から通りに出て、幽玄川ゆうげんの
橋のたもとまでありました。町通りが馬のなみにたとえら



れるほどにぎわうころになりますと、馬かっこうの格好の水飲み場に使われもしました。そんな時
代が過ぎると、こんどは、かえって邪魔じゃまになるし、水が通らなくなった溝ふけつは不潔にもなる
ということになりました。けれども、防火用水路としてなくすわけにもいきません。火災
のない年でも、水料として、片山ぜにへ酒や銭をとどけていたそうです。水源が片山の白山に
あったからですが、町通りまで水がやってくるには相当の時間がかかったことだろうと思
います。

新城のおまつりなどのときには、この水路がかえって邪魔になりました。

明治2年のときのことです。橋向からやってきたさきおど笹踊りが、本町に来て、置いてあった
だし山車のために通れなくなりました。橋向側は「山車が少しでっばっていないか。」といいま
した。本町側は「例年れいねんの通りだから通れるはずである。」と行って、らちがあきません。そ
のうちに橋向側の人うったが町役場に訴えましたので、町役人が来て、橋向のいうように、山車
を簡単に押しつけて、笹踊りを通してしまいました。本町側はおさまりません。町役人は
とうとう、「話がむずかしければ、役はやめてしまう。」といい出して、なかなか結着がつか
なかつたといひます。

そんなことのあった通りの用水路も明治23年ころにはなくなって、道の両側につくよ
うになりました。

市内には、こんな用水路が野田の新屋敷の町通りにもありました。

⑪市 いち 神 がみ

本町と中町のさかいの道路の中央に市神がおまつりしてありました。

これは、天正4年、新城にお城ができてまもなく、長篠城の近くに、市場いちばというところが（今でもある。）あって、そこに銅の観音さまがおまつりしてあったものを、ここに移して土中に埋め、その上に榎えのきの木を植えたものだそうです。えのきは、家の木いえといって、枝葉しげの繁る様子が、商売はんじょう繁昌えんぎにて縁起がいいということです。

このあたりには、立て札や常夜燈じょうやとうがたてられていて、往来おうらいもさかんで、人の集まりやすいところでした。明治のころになると客を待つ人力舎の車夫が何人もたむろしていたりしました。

明治15年に本町に大火があつて、榎の木も焼けてしまいました。まもなく市神もとりはらわれ、町中の水路も埋められていきました。安永9年5月あんえいと書かれた常夜燈は、富永神社に移されています。



(撮影 しんしろまちなか散策を考える会)

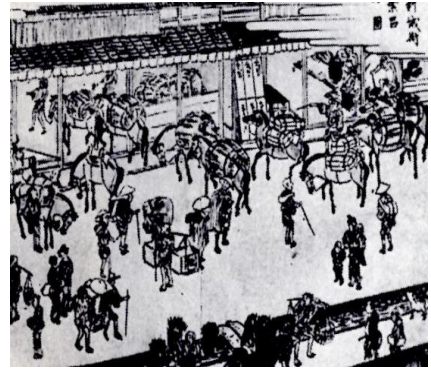
しんしろじょう

⑫新城 城の第一の門

市民体育館（今の市役所庁舎）の前に長屋風の家があります。その清水さんの家に、40センチほどの太い柱が2本立っています。

この柱は、新城城の第一の門で、この門をとお城の方へ通じていたということです。柱は、建ったまま家の柱として使用したものか、また果たして第一の門であったかどうか。この清水さんの家の通りは、大手通りといって、当時6つの木戸があった中の第一の木戸で、暮れ6つ（今のだいたい午後5時半）以後は、ここだけが特別急用のある場合に木戸番の許しを得て出入りが許されたところといわれています。

菅沼行蔵記による武家屋敷図では、この木戸の西に、家老の菅沼長七の屋敷があり、東に菅沼昇之助（長七の姉の子）の屋敷がありました。木戸のところに石段があって、その西側に番所があったことになっています。



⑬いぼにきく水

本丸の南側にあった三本杉は伐採され、その下の、崖の途中に池があって小さなほこら祠がまつられていました。その祠のうち、風呂の谷弁天は、宗堅寺に祭られ、天神社（梅の木でなた鉾彫りの天神様）は皆川家に祭られるようになりました。玉照稲荷は、現在は旧保健所の南に建てられていますが、その前なにある水鉢は、本丸広場から、風呂の谷弁天へ下る途中にあったもので、古多屋さんが購入して、後に玉照稲荷に寄進したものだといわれています。



その手水鉢にはいつも水がたまっていますが、その水をいぼにぬると、2、3日のうちになくなって取れてしまうということです。

⑭へびの頭の松

観音堂に昔から、大人3人が両手を広げてやっとまわせるくらいの、大きな松の木が立っていました。その大松は、途中で枝が二つに分かれていました。

いまばあさんが子どものころ「この松には、頭が二つある蛇がおるぞ。」「おそがいぞ。」などと驚かされたものでした。

たしかにその大松には、大きなへびの頭のような洞穴が2つありました。その中に蛇がいたのではないのでしょうか。

観音堂におられた尼僧様は、子どもたちが遊びにいくと、「晩になるとね、蛇のいびきが聞こえるんだよ。」などと話してくれたものです。

大松は、昭和26年に切り倒されてしまいました。今もその切り株が、観音堂の裏に残っています。



(撮影 しんしろまちなか散策を考える会)

⑮眼病を防ぐ石塔

私の子どものころの観音堂は、^{かこ} 囲いの中に梅の木があり、それは美しいたずまいで、近所の子どもたちの楽しい遊び場でした。

その観音堂に、河村^{ぜんとう}善統様とって、どんなお経でもお読みになる立派な^{にそう}尼僧様がお住みになってみえました。

その尼僧様から、子どものころよく聞かされた話に、目の病を守ってくれる石塔のお話があります。その石塔は、観音堂の裏のがけに2基たっていました。善統様は、子どもたちに「この石塔は目を悪くして亡くなった方のもので、ここへお茶湯をすると目がよくなるのですよ。だから、この石塔は粗末にはできないのですよ。」とおっしゃって、いつもねんごろにお参りしてみえました。

それから年月が経つにつれてだんだんがけが崩れて、その石塔が倒れそうになっても善統様はこの石塔を動かしてはいけない、といわれていました。しかし、そんなことをいつまでもしておくこともできず、すぐ横に立っていた大松を切り倒した時、石塔も移転することになりました。

現在は観音堂前の6地蔵様がおいでになる南側にお祭りしてあります。

今でも奇人な人は、毎朝、お茶湯をしたり、お花をあげたりしています。



(撮影 しんしろまちなか散策を考える会)

⑩秋葉様のたたり

西新町の公民館の横に、秋葉山常夜燈と書かれた灯籠とうろうがたっています。

この灯籠を、町内の人たちからは昔から「秋葉様、秋葉様。」と呼んで、毎晩欠かさずにお燈明とうみょうをあげておまつりしています。

この秋葉様に、不思議な話が伝わっているのです。それは、この常夜燈を移転するたびに、そこから100メートル以内の町内に必ず火事が起こるということです。

大正11年のことでした。八幡神社の表参道に立っていた常夜燈を、道を拡張するということで、弁天通りいつくしまの巖島神社の境内に移したのです。すると、それから半年も経たない、風の強い冬のある晩、100メートルほど離れた、古物商の沢田連次郎さんの家の裏の物置から火が出て、たちまちのうちに大きな物置が全焼してしまいました。

町内のあちこちから、秋葉様のたたりではないか、という声があがりました。

そこで昭和15年になって、再び常夜燈を元あった場所の近く、旧東海銀行の前に移しました。するとまた、半年もたたないある日、向かいの鳥居歯科医院宅の裏の倉庫から出火し、隣の3棟ほどを焼いて鎮火しました。それから1年ほどして、今度はすぐ下の、元カネキン八百屋のあった場所から火事が起こりました。いよいよ人々は、その恐ろしさに震え上がってしまいました。

それからしばらくして、旧東海銀行が拡張することになり、銀行側から町内に、秋葉山常夜燈の移転申し入れがありました。しかし総代さんをはじめ、町の人々は今までのことをおそれていましたので、移転話には大変消極的で、何回寄り合いをつけても誰も賛成する人はないという有様でした。

銀行側はやむを得ず、移転の費用は全部もち、さらに秋葉山本山詣での観光バスを仕立てて、町内の人たちを祈とうに案内する、という条件で、移転することになりました。それは昭和44年のことで、秋葉様は三たび現在の地へ移転したのでした。するとやはりそれから1年とたたないうちに100メートルと離れていない丸登旅館の裏座敷など6棟ほどが焼けるという火事が起こりました。本当におそろしいことでした。しかし、それから

は、10年余（この本の出版時）になりますが、火事も起きず、町内の人々もようやく落ちついた気持ちになりました。

町内では、あのおそろしい火事が再び起こらないように、12月の祭日には毎年当番と希望者とで、秋葉本山まで参詣に出かけています。



（撮影 しんしろまちなか散策を考える会）

⑰汗かき弥勒

西新町に一本の松の大木が立っていました。この松は、長篠合戦のときは見張りの松といったそうです。太平洋戦争時代に伐採されてしまいました。

この松の木のあった下は、石像の弥勒菩薩をおまつりしてあるお堂が建っています。町の人たちは、お堂を「観音堂」といい、仏を「おみろく様」といっています。



このおみろく様は、お天気を知らせてくれるといわれています。汗をおかきになっているときは、翌日必ず雨が降るし、乾いていると、お天気になるそうです。

町の人たちは、毎月17日に、講の人達が集まって、ねんごろにお祭りしています。

⑱ きん のぶ さくら 公 宣 桜

今からおよそ1,300年も昔、時の天皇の文武帝もんむていが重い病気にかかられました。そこで、ご病気平癒祈願へいゆきがんのため、三河国煙巖山えんがんさんの利修仙人りしゅうのもとに、草鹿砥公宣卿を勅使としてつかわされることになりました。公宣卿が三河の国までこられたとき、ちょうど美しい桜が満開になっていました。卿はそれをごらんになって、桜をたたえる歌を詠んで短冊たんざくにしたため、枝に結ばれたということです。その詠歌がどんな歌であったかわかりませんが、その桜をそれから公宣桜と名付けて、代々大事に育ててきました。

徳川時代には、新城の藩士の家の庭にありましたが、明治19年になって南設楽郡郡役所の前庭の井戸のわきに移植しました。それから長い間、きれいな花を咲かせていましたが、明治の末になって、惜しくも枯れてしまったそうです。

太平洋戦争がおわってから、新城の中西時兵衛さんが、このことを調べて自費でもって、公宣桜の石碑を桜淵に建てました。碑のうらには、公宣桜の由来や公宣卿のことなど、くわしく書き記されております。



(撮影 しんしろまちなか散策を考える会)

⑱井道のおいなりさま

むかし、井道には13軒の桃牛寺とうぎゅうじの檀家だんかがありましたので、桃牛寺のお小僧しょうじんさんたちが、夜、提灯をつけて井道へお経をあげにきますと、井道のおいなりさまの近くできつねが出てきてろうそくを時々とられたということです。村の人たちの中にも、町へ出る途中で、大勢ろうそくをとられたという人がおりました。そのころ井道は、林ばかりで、まん中に一本の道があって、弁天にある「なた屋さん」の田んぼを小作する人たちが住んでいました。農業が主ですから、自然とおいなりさまを大切におまつりするようになりました。いまでも、おいなりさまのお祭りの日には、桃牛寺の和尚さんを招いてお経をあげ、村中の人がおもちをついたり、赤飯をたいたり、おいなりさまにお酒やあぶらあげをあげたり、盛大なお祭りをしています。

日清戦争のころのことです。ある家の娘が親のすすめで、井道のお百姓さんのところへお嫁に行くことになりました。

花嫁の行列は井道の林の中を歩いていきました。夜の林の中の道は提灯のあかりをたよりにして歩くよりほかありません。行列が井道のいなりさまの前へきたとき、花嫁さんが、花嫁衣裳のまま消えてしまいました。お供の人たちは大さわぎして探しましたが花嫁はいません。とうとうその結婚は破談になってしまいました。

翌朝、村の人が、弁天橋近くの田んぼで、花嫁衣裳のまま田植えをしているその娘を発見しました。家に連れ戻された娘さんは、その後、心から愛する人のところにお嫁に行くことができ、一生幸せに暮らしたということです。おいなりさまが、娘の心を知ってひそかに助けたのかもしれない。

今でも、願いごとがよくかなえられるおいなりさまとして知られ、おまいりする人が多いようです。



(撮影 しんしろまちなか散策を考える会)

へいきちだいみょうじん

②0 平吉大明神

弁天橋の西寄り100メートルくらいの道ばたに、丸形の自然石で、平吉大明神と刻んだ碑が立っています。今は舗装された立派な道ですが、昔は、土ぼこりにまみれて白くなっていました。そしてそこに大きなグミの木が立っていました。この神様は、昔「かさ」(病気)で死んだ人だそうで、病気の人がこの神様に「かさで難儀してますから、なおしてください。」というお願いをかけると、きっと治してくれたということです。



(撮影 しんしろまちなか散策を考える会)

㊦ 旭白滝不動明王

医学がまだあまり進んでいなかった大正12年ころのことです。

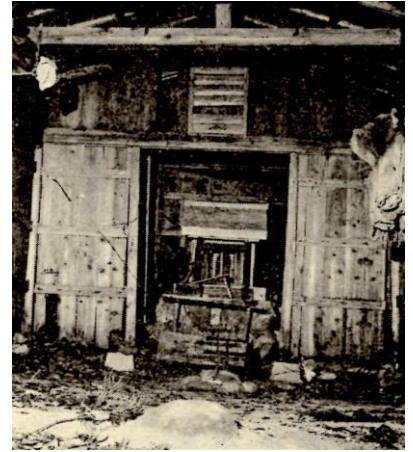
不治の病にかかってしまった、半助おじさんは、何とかその病気を治したいものだと考えておりました。けれども、おじさんの病気は進む一方でした。

おじさんの家からそう遠くないところでしたが、半場川がもう少しで豊川にはいるあたり、井道田面^{どうも}の東北に、林に囲まれた薄暗いがけっぷちがあります。そこに、昔からの、こけむしたお堂のない不動明王が立っていました。半助おじさんは、そのお不動様を思い出しました。病気を治したい一念から、年中絶えることなく流れ落ちているお不動様の滝にうたれてみようと決心したのです。それから、滝にうたれての二週間の断食にはいったのです。

日を数え、滝にうたれて過ごす2週間は大へんな努力と我慢がいました。いよいよ満願の日がやってきました。薄暗い崖っぷちは、あたりが急にぱあっと明るくなり、滝のひとしくひとしくが数えられるくらいになったかと思うと、向こう岸に、きつねの姿になった神様のすがたが目につりました。あまりに突然のことで、びっくりしましたが、はっと自分にかえった半助おじさんは、いつのまにかそばの草をつかんでいました。そして、それは神様が下さった薬草にちがいないという気がしきりとするのでした。

満願の日を待ちかねていた家族や親戚の人たちが、迎えにやってきました。断食と滝にうたれてふらふらになっていた半助おじさんを、みんなで家に連れ帰りました。

そして、半助おじさんが手ににぎっていた野草をせんじて飲ませたところ、不治の病とされていた病気も日増しによくなって、とうとうなおってしまいました。もともと石工^{いしく}であった半助おじさんは、病気を治してくれたお不動様を大へんありがたく思い、不動明王の像を新しくして、まつることにしました。早速、石を刻み、心をこめて像をつくりました。そして「旭白滝不動明王」と彫りこみました。半助おじさんはあまりのありがたさに、その思いを、長くこの不動明王^{たく}に託して、残さずにはいられなかったのでしょう。



この話に感動した東新町の人たちはお堂をつくり、毎年の4月には、みんなでおまつりをしてきました。また、お花を供えたり、乳房の形をつくって願いをかけたりする人もあります。半助おじさんとは、実は、私の父親で、ほんとにあったお話です。

はちまん

②八幡のいわれ

八幡宮というのは全国各地にあります。これは弓矢の神、つまり、武士の神様としておまつりしたものです。東新町のお宮は八幡社で、ちゃんとしたお宮になっていますが、橋向の八幡は地名として残っているくらいのものです。

どうして八幡かというと、新城城ができる前、市内にたくさんの城を築いていた菅沼定継さだつぐという人が、石田の、新城古城にいたころ、新城の東と西に八幡社を創建しました。新城の町が自然と弓の形をしているところから武道の神様をお迎えするようになったのだともいわれています。

新町の方は、笠岩かさいわの近くに、一の鳥居いの一の鳥居があって、そこから西新町にしんまちを経て、お宮に行く参道がありました。

橋向の八幡社は、もと大善寺だいぜんじの南で幽玄川ゆうげんがわへおりていく道があり、そこを越すと清水しみずが出るところがあって、女の人みんな洗濯をしにそこへいったものですが、そこからさらに西へすこし行ったところにあったのだそうです。



(撮影 しんしろまちなか散策を考える会)